



北欧3国を旅する — 幸せの国のかたちとは —

土門孝彰



(秋田銀行営業支援部 チーフアドバイザー/インスペック株式会社 取締役
一般社団法人エレクトロニクス実装学会 電子部品・実装技術委員会委員長)

昨年、「あきた経済」3月号に欧州旅行の内容を寄稿したところ、多くの読者よりリアクションがあったことから、今回はその続編として「北欧3国を旅する」と題して旅行記をまとめてみた。元々コロナ禍前に企画していたものだったが、コロナ禍の拡大やロシアのウクライナ侵攻による政情不安などで実行が延び延びになっていた。

本文で紹介するスウェーデンやフィンランドは、この数年の間にNATO（北大西洋条約機構）加盟を果たすなど、大きな転換を遂げている。幸福度ランキングで常に上位を占めている北欧諸国の幸せのかたちとは？これらの国を旅して感じたことをしたためてみたい。

1 はじめに

北欧はヨーロッパでは日本から最も距離が近いが、今回はロシア上空を回避し北極圏を横断する飛行ルートで14時間のフライトであった。旅の始まりは、フィンランド・ヘルシンキから。スウェーデン、ノルウェーの3か国を周遊した。

毎年ノーベル賞授賞式が開催されるストックホルムやオスロも訪問したばかりだったので、日本の被団協（被爆者の立場から核廃絶を訴えてきた協議会）が平和賞を受賞した映像が流れたときは大変感慨深かった。

2 北欧の3つの国

第1章はムーミンやサンタクロース、サウナで有名な、フィンランドのポルヴォーと「バルト海の乙女」と言われるヘルシンキの旅。

第2章はスウェーデン。ガムラスタンに代表され、「北欧のベネチア」ともいわれるストックホルムの旅。

第3章はノルウェー。長年の夢であったフィヨルドのクルーズ周遊、世界遺産登録のベルゲン、山岳鉄道を利用して訪ねたオスロへの旅。

以上の順番で旅のプロセスを紹介する。

<第1章>北極圏を越えて「幸せの国」フィンランドへ

2024年7月2日に成田を出発。フィンエアーを使い、ヘルシンキ・ヴァンター国際空港よりフィンランド入りした。朝早い到着のため、滞在するホテルのチェックイン前に、赤い倉庫群で有名な古都ポルヴォー、交響詩「フィンランディア」の作曲で有名な、ジャン・シベリウスを記念して作られた公園を北緯60度の夏の風を感じながら歩いた。

1952年に開催され現在も改修しながら使われているオリンピックスタジアム。72mにおよぶタワーが象徴的な公園で、古いものでも大切に使用しているフィンランドらしさを体感した。

腹ごしらえをして、ヘルシンキの中心部へ戻り、ヘルシンキ大聖堂、元老院広場などを回った。現地ガイドがもっとも見てほしいと案内してくれたのは、世界最高の図書館に選ばれた中央図書館、通称：Oodi（オーディ）。IT化による図書の自動返却ロボットや、全面ガラス張りで解放感のあるフロアと1Fにはおしゃれなカフェレストランがあり、家族の憩いの場となっている。車椅子の利用者への配慮も行き届いており、コンセプトの巧みさは是非とも参考にしたい。さすが、通信機器大手のノキアを創出した国である。フィンランドは公設図書館が充実しており、国民1人当たりの読書量は世界一と言われる。学力が世界トップレベルにある理由の一つなのだろう。



(ヘルシンキ大聖堂、元老院広場)

夕方の方のバルト海クルーズ出発まで、ヘルシンキ中央駅周辺のエスプラナーディ公園や緑豊かな通りを、アラビア、イッタラ、マリメッコ、ムーミンなどフィンランド発祥の世界的なブランド店でのショッピングを楽しみながら散策した。かつてヘルシンキを舞台とした映画「かもめ食堂」に登場するカフェ・アアルトでコーヒータイム。ゆったりと居心地の良いカフェ文化も根付いている。赤い煉瓦造りのウスペンスキー寺院は、北欧最大のロシア正教の教会であっ

た。フィンランドは地理的にスウェーデン王国と帝政ロシアに挟まれているため、両国から幾度となく交互に支配されてきた。二国の文化が色濃く反映されているのを感じた。

マーケット広場の露店には海産物や新鮮な食材が並び、横目でサウナ施設を見ながら次に目指すストックホルム行きのバルト海クルーズへと旅を進めた。

<第2章>ノーベル賞授賞式が行われる、「世界一美しい首都」ストックホルム

2024年7月4日、タリンク・シリアラインでバルト海クルーズを楽しんだ。季節は夏であるが、北極に近い高緯度の甲板はさすがに寒く、上着を重ねながらバルト海に沈む夕日の美しさを堪能した。船内で食事や買い物、音楽やダンスのステージを楽しんだ後、船室に戻り心地良い眠りに…。

翌朝、バルト海の小さな島々と微笑む朝日をバックに、船はストックホルムのバイキングターミナルへと向かった。

ストックホルムの街並みが近づくとつれワクワク感が高まった。市庁舎、ノーベル記念館、中世からの建物に挟まれた石畳のある小路、黄土色とオレンジが主体の特徴ある建物が象徴的なガムラスタンの街並みは、映画「魔女の宅急便」の舞台のモデルになった。町全体でノーベル賞をお祝いするかのような、中世の歴史が薫る水と青空が印象的な町であった。ノーベル記念館で出会った「Ideas changing the world」というメッセージが心に響いた。受賞関係者が宿泊する海沿いのホテルでコーヒーを一杯。ホテルマンの服装や所作がとても美しかった。王宮前広場での衛兵交替式は必見。「北欧の水の都」と言われるが、空と水の青が美しい自然と調和した都市は感動的であった。



(ストックホルム 王立オペラ劇場前広場より
遠くヘラズホルメン島)

<第3章>フィヨルドと世界遺産の国、ノルウェー紀行

2024年7月6日、ストックホルムのアーランダ国際空港を出発し、一足飛びにベルゲン空港からノルウェー入りした。

ベルゲンは海に面した世界遺産の街(旧首都)で、旧市街のカラフルな三角屋根の木造倉庫が並ぶブリッゲン地区は、13~16世紀に北ドイツを中心とするハンザ同盟の中継地として栄えた。標高320mのフロイエン山頂から眺めた美しい港町は、魚市場で食べたパエリアの味とともに、忘れられない自然豊かな古都であった。



(ベルゲン ブリッゲン地区)



(フロイエン山からベルゲンを望む)

ベルゲンを後にし、世界最大スケールのフィヨルドクルーズへと向かった。オスロを終点とするベルゲン鉄道を利用し、クルーズ船が発着するグドヴァンゲンへ、時折林間からの湖面を望みながら進んだ。ノルウェー国内は夏のバカンスシーズンだったが、夕方の出発便を選定したことで比較的乗客も少なくゆったりと船内外を行き来しながらフィヨルドの絶景を満喫した。水面は穏やかで、静寂の中、船は進んでいった。水辺にせまる絶壁や断崖に立つ小さな家並みの村、時折羊たちの群れも見られた。船外はニット帽などの防寒具を身に着けてのクルージングであった。



(フィヨルド 点在する家々)

フロムでの下船後、世界で一番長い24.5 kmの道路トンネルを潜り抜け、フィヨルド水辺のラルダールの森のホテルで一泊とした。

7月7日朝、ホテルを後にし、フロム鉄道でミュールダールへと向かった。標高差864m、距離20 kmのフィヨルド溪谷を60分で駆け上がる力強い観光鉄道だ。ショースの滝では赤い妖精の出現?をカメラで確認しながら周囲の自然にいつの間にか飲み込まれていった感があった。

旅行案内書によるとベルゲン鉄道を建設するためのフロム鉄道であり、北欧では最も急勾配で最も美しい山岳鉄道の一つとされる。

ミュールダールからヤイロを經由し、一路オスロへと向かった。途中、ウインタースポーツ

の世界大会が開催される地域も確認できた。日本や欧米の大都市と異なり、鉄道は単線であり、上下線の列車は最寄りの駅で停車して交差する（地方では当然のこと）。渓谷の断崖絶壁に沿って走る山岳鉄道を切り拓いた人々の技術とノルウェーの雄大な自然へ畏敬を感じた。

旅程の最終日となる7月8日は、オスロのフログネル公園の中にある「ヴィーゲラン彫刻公園」を訪ねた。193体の彫刻があり、刻まれた人間の数は650体、老若男女の喜怒哀楽を表現した裸像が立ち並ぶ。園内に解説らしきものは一切無く、観る人がそれぞれ感じ、考えるコンセプトで建設された公園だった。作者ヴィーゲランの「人生の縮図」をテーマにした思想の集大成とも言え、空や緑がふんだんで開放的な芸術の森であった。

スキーなどのウインタースポーツが盛んな国らしく、スキーのジャンプ台なども山並みの中に遠望できた。全体を通して、ノルウェーの人々は自然環境を積極的に利用して生活しているように感じた。

3 終わりに

NHK-B Sの旅番組を何度も鑑賞、研究しての計画ではあったが、TV映像と比べていずれの場所も現地では10倍、いや100倍ほどの迫力があり圧巻であった。

北欧3国の国土面積はそれぞれ日本とほぼ同等であるが、フィンランド、ノルウェーは、全人口が500万人ほど、スウェーデンでも1,000万人ほどの小国である。日照時間が短く、寒さの厳しい冬の気候は秋田の風土とよく似ている。今回の旅を通じて豊かな自然と共に暮らす人々の内面的な豊かさも感じ取ることができた。そんな北欧諸国が毎年、国連の「幸福度ランキング」の上位に名を連ね高福祉社会を実現できているのはなぜなのだろう？ワークライフバランスを重視し人間らしい働き方、生き方が可能な社会。貧富の格差が少ない平等な社会（路上にホームレスがあふれている米国社会とは対照的）、バリアフリーな優しい街づくり、北欧諸国の「幸せの国のかたち」をこれからも注視して行きたいと思う。

<今回の旅の主なルート> 北欧三国

